

人肉サラダ

藤 本 義 一



もうガッちゃん



晶文社

著者について

藤本義一（ふじもと・ぎいち）

昭和八年一月二六日、大阪に誕生。

大阪府立大学経済学部を七年がかりで卒業。

後、徒弟制度に憧れ、映画会社臨時雇員となり、衣笠貞之助、川島雄三、木村恵吾、久松

静児等の監督について転々。

シナリオ・ライターとなり五十本ほど発表するが、映画産業斜陽のため、テレビ脚本家に

転業するも、テレビドラマ制作が殆んど東京制作になったため、テレビ司会者となり、小説

を旨として現在に至る。

この間、芸術祭長編戯曲部門で文部大臣賞を受賞。（作品名「つばくろの歌」昭33）

河出文芸賞戯曲部門佳作。（作品名「日時計の家」昭39）

第七一回直木賞受賞。（作品名「鬼の詩」昭49）

人肉サラダ

一九七五年七月二五日印刷

一九七五年七月三〇日発行

著者藤本義一

発行者中村勝哉

発行所株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一〇一一

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六二七九九

中央精版印刷・美行製本

ブックデザイン平野甲賀

©1975 Gicchi Fujimoto

〈検印廃止〉 落丁・乱丁本はお取替えいたします

人肉サラダ

藤本義一



晶文社

カバー・イラストレーション
湯村輝彦

人肉サ
ラダ

9

あとが
き

228

人肉サラダ

序章

天に星なく

月もなく

地に一握の情なく

生きる術をも失いて

われ 夢さえも見飽き果て

彷徨うだけの運命かな

おっさん、しっかり、してちょうだい

安宿^{ドヤ}の落書をハトやんは、いつの間にか憶えてしまった。といっても、ハトやん流の読み方で

あって、一握をイチアクとは読めず、情をココロとは読まずにジョウと読み、術もスベとは知らずに忍術のジュツだからジュツと読み、見飽き果てはミスギハテと読み、彷徨うは、サマヨウとは読まずサスラウと勝手に解釈し、運命をサダメとは読まずに、ウンメイと読んだ。

だから、正確に読めるのは、はじめの二行だけで、三行目からは、出鱈目であった。

最後の「おっさん、しっかり、してちょうだい」はハトやん自身が付け加えた一行である。

読み方は出鱈目であったが、文章の意は解釈出来た。淋しく、悲しいと思った。

これを書いたのは、閣下だとハトやんはタンクから聞いた。

「あの閣下がかいな」

ハトやんは、正直いって愕いた。

閣下は、夏冬通じて厚手あつでの襦袢ほろ服を着て、靴の前はぱっくり口をあけ、登山帽を目深にかぶっている六十五、六の瘦せた老人で、胸に菊の花の勲章を付けている。老人性の痴呆症らしく、ゆっくり歩き、立ちどまっては、胸に手を当てて、アオツと奇妙な声をあげ、これ以上口が開かないというぐらゐにして吐瀉する様子を見せるのだが、出てくるのは粘った黄色な水がほんの一寸なのだ。

「あの閣下が書いたか」

「そや。わい、見たもんな、この目で……」

タンクは嘘をいう男ではない。

大体、釜ヶ崎で嘘をいっても一文の得にならないのが常識である。嘘をいって得をする社会は、釜の底から這いあがった社会であると釜ヶ崎の住人は考えているのだ。だから、損得なしの嘘をつくことはあるが、それは他人を陥^{おと}しいれるための嘘ではない。自分を飾りたてるための嘘である。虚栄心といってもいいだろう。可愛いものだ。過去の栄光を創作する。その創作した過去、飾りたてた過去を誇示するために、彼等は外見に人間栄光ラベルのようなものを付ける。閣下の勲章もそのひとつである。外見にラベルを付けない男は、渾名^{あだな}で力倆なり特殊技術なりがわかる仕掛になっている。ハトヤンというのは、かつて天王寺駅に巢食う鳩百六十羽を一夜の裡^{うち}に捕えて焼鳥にして、仲間の空腹を救った栄光から付けられた渾名である。三年前の梅雨時、仕事にぶれ、職と食を失った漁者^{じょうもん}（と彼等は不定期労務者、つまり浮浪者を呼ぶ）の露命をハトヤンは救ったのだ。天王寺駅の鉄傘の中に軽業師のように潜り込んで、鳩を捕えて来た。眠っている鳩の首を掴んで後に振るようにすれば、クツと声あげる間もなく、鳩は翼をひろげた恰好をして息絶える。それを大きな珈琲袋の中に叩き込むのだ。ドンゴロスの袋には、珈琲の芳香が浸みついていて、鳩の毛筆^{けむし}りをしていた連中は、ほんの一刻^{ひととき}、甘美な夢の世界に遊ぶことが出来た。焼鳥になった鳩の皮にもまだ珈琲の匂いが浸みついていて、醤油の味の底から、ふっと南米の世界が垣間見えるようであった。

「もし、ハトヤンが、あの時にやな、鳩を捕まえて来てくれへんかったら、暴動が起っていたかもわかれへんで」

と連中の間で語り草になっている。事実、暴徒と化した何十人かは、旭町や飛田大通りの釜の縁にあたる部分の食料品店を襲って、強奪し、検挙された。二、三人はいち早く釜ヶ崎を遁走したが、ほとんどの暴徒は、その翌日に安宿で、あるいは路上で検挙されたのだった。理由は簡単である。各店舗は商店街の申し合わせどおり、毎夜ストロボ付きのカメラを店の天井の棧や物蔭に仕込んでいたのだ。

「そういうたら、侵入った時に、パッパッと光ったさかいにびっくりしたなあ」

と、彼等は残念がったが、後の祭りであった。

だから、鳩の恩恵を受けた連中はハトやんを尊敬しているのである。誰一人としてハトやんに空巢の前科が三犯もあると思っていない。彼の言葉を信じて、もとはサーカス団にいたと信じているのだ。

ハトやんは三犯目のお勤め終えて堺の金岡刑務所を出所した時、空巢は……というよりも犯罪は商売としては割が合わないものだと思つた。第一に出所時に支給される金額は微々たるものである。三度目の刑期は三年だったが出て来ると、物価は三年前に較べて二倍平均高くなつていた。娼娼に出て、いつも買っていた一個二十円の石鹼を買おうとしたら五十円也になつていた。歯刷牙、手拭すべて二倍強になつていたので、服役中の作業費は變つていないのだった。司法行政と現実との差があまりにも大きいのに愕然となつたハトやんは、空巢はやめたと心に決めた。

彼は、決して出所時に警護課長が垂れた説教に従ったわけではない。課長は半分眠っているような顔で淡々といったものである。

「世の中には、善いことと悪いことがあって、人間は悪いことをしたならば、悔い改めてまた善人の入口にたちもどることが出来るわけや。これは三歳の童子でも知っていることや。お前は、その入口に立ったということやから、今、わしのいう言葉を肝に銘じて、善良な社会の一住民となつて、世のため、人のために尽すように心がけることが第一やで。さ、出て行きなさい」

あの課長は、もう何百回と同じことを繰り返しているにちがいないと思ったものだ。念仏のようなものだろう。いい終つてから、ぼんと肩をひとつ叩いてくれたのも、前二回と同じことであつた。

深く頭を垂れながら拝聴していたハトやんは、

「なんかしてけつかるねん」

なにを吐いて（はき）いるのかと心の中で反論したものだつた。風呂敷包みひとつ下げて、刑務所の塀際ぶらぶら歩きながら、決して振り向くことなく、陽気の中を堺東駅まで降りて来た。一時間ぐらいいかつただろうか。振り向かなかつたのも泥棒のジンスから従つただけである。刑務所の方を振り向くのは、また縁があるというのが泥棒仲間の申し送りである。

だから、ハトやんは、ただ前を見ながら、娑婆の空気を肺腑に吸いながら歩きつづけて、商店街に入ったのだつた。商店街で物価、とくに日用品の高騰に啞然となりながら、早くも次の犯罪^{犯罪}

に想いをやっていた。どんな家を狙おうか。新婚の一戸建文化住宅、分譲住宅というのが一番いいのではないか。あるいはまた「追出し」（電話で店員や家人を追いついて盗む）をやってもいいのではないか。あるいは「借用」（トイレ、電話を借りたいといって隙を見て盗む）を商店街の一軒を舞台にやってやろうか、それとも黒い布片巻いて葬儀場で盗むか、赤と白のリボンつけて結婚式場に乗り込もうかと考えていたのだが、あまりに物価がなにもかも騰（あが）っているので、正直いって、金の価値も半減したのだから、犯罪を踏んでも儲からないと気付いたのだった。

物価の高騰がハトやんの犯罪意欲を消してしまったのだった。

ハトやんは、煙草屋でハイライト一箱買い、ピツとセロファンの赤い帯を引いて、先ず一服喫い、肺にふわッとひろがった煙を細く長く吐き出すと、煙草屋のおばはんに、

「あの、今、首相は誰でんのや」

と聞いてみた。彼は依然佐藤首相がつづいているのを刑務所内の新聞テレビで知ってはいたのだが、どうしても聞いてみたい欲求に馳（は）られたのだった。

「シュショーで……」

おばはんは、怪訝な表情でハトやんを仰いだ。

「総理大臣やがな」

「どこの国の……」

「日本の……」

「佐藤はんでんがな」

「あ、そうかいな。なんし、外国へ行ってたさかいにな」

ハトやん、誤魔化して、葉書一枚とボールペン一本を買い、向いの純喫茶店に入った。

珈琲代も三年前より五十円値上げになっていた。¥100の下二桁に紙が貼ってあって50と書き直されていた。ハトやんは、珈琲を注文してから、爪の先で貼ってあった紙を剥ぎ、旧の値段を確認したのだ。

「ほんまに面白くないなあ……」

呟きながら背を丸め、まるまっつい文字を葉書に並べた。

拝啓 佐藤首相様。

私は一受刑者でありましたが、今回めでたく満期出所の身となりました。物の値段がアガッテいるので、泥棒しても阿呆らしいと思って、足を洗う者です。もし、私が、今、空巢で百万円盗んでも、三年前の五十万円にしか当りませんでしょう。これは阿呆らしいのであります。それで刑をくろうたなら、今度は五年のオットメになって、阿呆らしいかぎりやからやめるのです。

ありがとうございます。私を善人にして下さいましたことをカンシャします。

さいなら。